



芽吹柳
全

特
利
3869
40



利 9
3869
40

大正七年吉寄
室井平藏氏贈

此書は初回印刷の無誤を
念ふに冠冷再校中を以て
俾てくは海出版を以て
書再えとるゝに自筆堂主
予は是を以て得たに過ぎ
折白冠冷の一方能輯案
余は其形を上位に以て
斗を撰りて多しは福福原
抄りて是れは是れ也
毎高厚 懸案のりりりり

亭

さしあ葉をくひ流のくちま
 ち目あ湖の留る泡のほし
 舟のつとまのし十分はつた
 船艘のよき船龍伝言の年
 とも今流りしは白雲深き
 ちりともなるの海にひらけ
 道は揺るこもち候ともす
 とかゆはたお波のさし
 ちりありのさし

ちりありのさし



浪花 山下巴勢改
 年々坊叟夫

五五庫 雪光菴素洲

兵庫 入齒軒呂石 撰

浪花 松諷亭琴史

全 浅芽菴羅山

全 顯光亭麻貫



○

云ふんあー

娘と道いぬを刈

一人あさん

毎日目まげしとる

雪り流りなし一日の意

焼ひ破木

今ハ鑑の端よあ

柵の引らぬ一葉を撰

門くくちよ冬送

いつあてりても

何の樹は音はな

さきたま

糸色一うりま松の目

一

花をぬ拾の思葉出

大師流でいふ虫ん

いそ

常子り丸一也

其のやうよあけ

虫一籠は花の飛ひ

勢い 旭

備つてお門も尋て揺

柔くもせぬおつきた

あさん走り

いづれ 居りてのたぬ

あつひおで出ようか

石ながれ

お君よ流れて有のぬ

今がささう

とめらるるも枝さう

井の瀬ど

春の心とやうな一曲

いづれ

やがてぬれぬ色紙

網よ成やう一飲

おんもおは

白ひきておひ

勢い

アキタく松林の

一月日

是で同勢そりかこむ

③ 六根清淨

業縁よこめる縁どやふい

本位の修でい絶がぬい

縁中よこ一抜指中やせん

ろもか心も

今てい夫百性て後らた

老切

首をばしとよはてしや

六根の過

細くあてとり孫の世

堂座の方と日遠

ろんまーりく

外よふらど外ろる

アレが過年日十文

④ 裏トやナア

態々容だけ一の容

古々一あひあ送り

花風

迅新いよとと新で吐

あひく

後日じやくそくおちよる

八中さめ

蟹牛養よわうり

糸屋の垢柳さんより

八卦 兄と

子へあ方の気る女房

花い草よ持

一年乳又をこころ

梅の花よやチア

他の

他の果糖の故かき

中平はこり たつき

をぐう

葉を産の葉よも浪が

ぬきをみうらと龍じやまひ

人 氣よま

大江の春よ浪が

よこ

まよやうまき

とひ 穂をさつめて

一 松が動るお雨休ス

張るん

一 けき掛いと放るよ

よこくはやく

一 破見のあそ程思まは

一 白帆一舟の便りい

一 海樹が自ふるともえぬ

一 かざうはくくうりあてある

一 破もみそも端一

一 ちあそくくめく

一 止ぬまんがる

一 ちりすのあん杖とつ

一 掛てあつこと思ふよ

一 ちりすのあん杖とつ

一 つあつて見る縁が切し

一 ちりすのあん杖とつ

一 ちりすのあん杖とつ

一 二八のあん杖とつ

一 母老人のあん杖とつ

一 二階のあん杖とつ

掬子と紙くずや、おろし

④ ぼんぼろしん

社。よ入ッてあま清さん

本郷道

あさま 天窓の上よあまいゆ

海ノく

名と多るとと名とまお

外まあひ

何あが免てもちいふ

岩月ヲツク

ずいぶん世ながれ

ぼーく

コリヤかんざんであま

ほろし

チト合ひ舞でもはるん

本町

あましこの時の香と色

コイツを撮しあまのド

アノ子で向が観念する

● 別 世界

浦津歌うらつじうたのあそび

別れのど

ぬり板の中おし合ぬ

べんぐだり

ちさ火で冷めしとぬめ

梅子うめこようふ

鼓合しと庭と迫い

へくくハハハ

てや為世の値とさう

茶の春一掃でまら

死し筆ひつ志しを

そまはさうしけりまは

◎ さくしん

やうとこいしーか

お名なんん突つすすよよりり

松のーつつかかずずと志し笑わら

さくしん

あうあうごごとと載のりりてて戻もりり

八幡やまはた徳とく聖せい又また守まもりり志しを

扇あふぎのの魚うまををごごととややああひ

通天扇の纏達

とそめものり

紫の足奪ふ迄

中大坂のそつと

右市で盃付と成り

ごろ足ど

風呂屋と下法をよほし

ありまゝおと

道々穿つよのよ市が

まごころあふ

那よち浪の音

あふかふか

鐘の音の音で破

あゆめ

御殿の御内裏

あふか

大坂の城をちん

あふか

町の一疋も

了し結を急よ

① 小いふても
櫛くしでふるけお玉

ちきどき

水みづの山やまにお蓮れんえ

吹ふつと能のう争まつゆぬ

車くるまておとよふ也なり

カラ一いちなる

白しろい色いろ店みせの色いろよじ

珠たま抱かかく

手ての甲かみれ方かた一いち毛け後ご文ぶん

ちりり

笑わらふどくか人ひと海うみ

ちく生なまえ

常とこそふ傘かさかしてやる

世よ中ちゆう心しんとくす

② 里さと々々志しやん々

庭にわの幕まくらでくけり

地ちの方かたよあるもがね

せんごくもせだ皺しわがよう

ユリヤ着きるじがさふめ

ツイ帯りよするたきさうけ
年の菜もも考が又ん
私一おのが出やうにんり
根子の至お笑ふ女産
料理 一し
食ふ持よと地かげん
業代いしふり思や
人形袋うの首斗り
立流ふり力
菜の菜も見り立

十洲村のよ遊り
右子の横れ作とくけ
利の十々

出し〜〜はて〜

ぬ ぬの〜

あふらつてさラツで出る
そん人で生と松竹梅
音解致してり
お家さんおえんお中へ
お人へ有るもよ達者

此のち七^ど場の心^{こころ}先^まやー

ぬう〜ぬく

お花^{はな}くち^{くち}川^{がわ}と^と瀬^せ子^こ替^か

う^う花^{はな}を^をの^の下^{した}結^{むす}一^{ひと}林^{はやし}方^{かた}

三^{さん}味^{あじ}路^ぢの^の笛^{ふえ}振^ふで^で と^とあ

ぬう〜がなひ

流^{なが}レ^レの^のあ^あよ^よ武^ぶ蔵^{ざう}の^のあ

ぬう〜と^と出^で

玉^{たま}えん^{えん}一^{ひと}人^{にん} 巻^ま折^おり^り一^{ひと}や

十^{じゅう}後^ご一^{ひと}巻^ま一^{ひと}巻^ま量^{りょう}

ぬう〜ぬく

名^なりの^のて^てり^りし^しよ^よん^んの^のあ^あん^ん

る^るふ^ふが^がな^なひ

は^はな^なで^でな^なる^るお^お方^{かた}

新^{あらた}お^お形^{かたち}でも^{でも}さ^さし^し一^{ひと}響^{ひび}も^もな^ない

藤^{ふじ}でも^{でも}花^{はな}子^こと^と入^いり^りと^とや

る^るふ^ふが^がな^なひ

名^なの^の友^{とも}と^と別^{わか}れ^れよ^よふ^ふき^きこ

虎^こ猫^{ねこ}と^とな^なら^らず^ずと^とな^なら^らず^ず

る^るふ^ふが^がな^なひ

コツト承知

眼でそふるを首でま

① 若いテ、

運立ッぬくおとさ

大佛の塚うらさ

露りつ死の香よまらひ

めしを食いさ乳いのりぬ

こやどや

松エけらまづふととけ

やぶのてはよふぬしんじ

おく〜げ葱ねがひまけあはし

② 松 庭

青糸風よ下はぬきさみ葉

板いの〜まわりや小玉さく

たぐきんそふま衣まつれ

葎あさな木槿つばき 楓かえり 李り

暑いの弓人ぬい葉の香

相合するさど熱金や

空 ぬ 梅

まご神風ハそと吹

かんざしで

よふみまのんをまゝん

青のの福とやうつら

今に夜のおいぞうおん

肩より拭

錦も札のよよま

すじりよまきと秋をら

落葉の風で湯気さぬ

香がのこり

梅と蓬よあがた

香よまうい

たう梅をとあくとち

蓬の録をたきあ

あうもあ

白朮どうりぬお一

やの漢葉よそ他

恩の口もそ

かんどり

あまの男のこ人と

網だくゆり網をへ

かき 髪 あらう

何の着ひ流が持てある
さうさう今夜持ての書
どの戸前あつと明たされ
あんと葉が白の味ひナア

かき 髪

草刈 髪 子 苗 吹 ぬ

枯れ 木 も 止

控んで居るもたはくろふ
ニツ一とさあらう たて

よ 世の中く

白いお使門 へん へん

よき こと 流

コリヤく 店 お葉 汲まよ
今夜の油有リやようんが

已刻 木 色 弁

髪でぼとく 孫 けり
牛のよざれとあふ流

夜 の 鶉

懐い仕事も持てはぬ

夜昼なまふ

形守も舎る枝の地

よひ じより

縁を揺りくばるもの

⑫ 車 らま

まのびるをすすむ者の香

たふみあひか

一里ん房こんでりい

を養く

繩費めいんごまへあひ

たのまふ

紙の葉紙の清ま

よざれけしと紙が元

のうぬ紙へ新橋する

まひあふ

花を玉と籠てある

玉

糸を極すぬり際子

ぬきで代品おつらぬ

旅の

海でゆらゆらと揺る
ライ等も可憐子の中元
さうい

山の麓に居る鳩鳥
てしめぬ心方が研く

抗髪 糸をくくそうせぬ
きぬのぞい

海心くくく煙り立
けやまつくさる上とみせ

傍に付海心

田舎にゆりも糸で束
そんあうソウ

葉と一トはで吞くさぬ
ひまはと葉と揃て立

さうと濁つてさうと海
つんどう

ゆく扇の隙子どけ
嵐が来ても吹んぬ

先生は校いりりバ

葉のしめつるありき

つみんでんそ

さしそく室のりよ出そを

百目あるあき

月夜と巻

只程が歌うらまそそ書

つくらあき

ぶらんのかく操のせ

鶴首ど

ひぬ初日よ龜とよひ

様とナ

入梅よつねさあてり

つりようふ

枝えとらうらやま

ね 形ひが可い

ぬきばよ汲める扱あり

糸入

麻うろ踏のそへ

藤 表カエ

世に房より押記さるるし
娘さふにが迫り出

④ 中くく

かんとせんせんと共にぬ

あしと

夜明と東うらつげる

何とも

又て汲葉の碎がさめ

喉よ帯屋とまてあひ

浪も嵐も

古いやらどやと笑てま

いさげあひ

のりてくれし娘をさる

何ぞつてえ

青公らふふあうとやう

⑤ 羅生門ぞ

智勇さんふを殺生やめ

礼さうさ

姉まが肉うら蔵を因

らちがあま

志う〜い岩付々ののん
押か〜井たを〜ようし

屋後の物よ

あひか〜くきがつとさ

ふと〜や〜

ふ砂のるす嫁の別後

ふさふさ手〜梅あ〜り

たさよえ〜よ〜しては〜

⑤ 麦め〜を〜

コレは〜んのお〜

梅は〜意

奴〜え〜ひか〜

新〜〜ん〜

悪〜〜向〜

ゆ〜〜

多〜〜ひ〜

む〜〜

と〜〜

昔〜〜

ゆ〜〜の〜

見せさかりにむかひあひ

⑤ くらと見下と見

程はあふ世の程と知り

かれそら後よちちおろぞ

こころのあでおうんどと

あゝ ———

ほもふれ旅の遠ふ中房

旅の女史をえらる 女史

あゝ ———

能い給銀が後りしん

あゝ ———

顔の切、旅を急おた

あゝ ———

氣に強うれ強ちのび

あゝ ———

女の端もよもいえ、

あゝ ———

中を廻りぬ庭をまひ

⑥ 朝の十ぶん

あゝ ———

のちれ法

に乃るりののうら

ぬけて有蓋でかきよる

二日く二雨あぐり

のびらく

終の標案 点尻がふ

身とさのうぬえで

蔵のここーおひ廿席

のんごり

左不音く ぶあ音

のどろかふ

子りり揚まよふおび

紙法の形でみるか物心

のそらんご

隠してやろよもアノ體

玉のまりの

六十やぐり 白糸

たしでもうれでもはるんち

つらもぞんぐ 子慈えん

くまふく

お八百どん^{おん}の^どつ^りてん^り

玉の^{たま}お^ん

引^ひ毎^{まい}くく^く後^ごすく

足^{あし}の^の遠^{とほ}老^らか^か鳥^{とり}平^{へい}え

く^くぐ^ぐう^うて

の^のり^りと^とお^おくれ^{くれ}と^とあ^あら^らら^らん

あ^あの^の友^{とも}よ

家^やちん^{ちん}が^がや^やら^らら^らら^らん

若^{わか}が^があ^あん^んく

お^おん^んて^てう^うや^やて^てお^お遠^{とほ}老^らか^か

く^くせ^せが^があ^あひ

あ^あま^まの^のあ^あま^まと^とほ^ほく^く飛^とひ

圓^ま形^が横^はあ^あで

出^でま^まけ^け巖^い掬^くけ^けあ^あひ

空^{そら}の^の永^{なが}通^{とほ}り

お^おち^ちよ^よの^のあ^あま^まと^とこ^こも^もあ^あま^まの^のあ^あれ

く^くど^どう^うれ^れく

あ^あで^で一^い軒^{けん}は^は花^{はな}露^{つゆ}付^つけ

葉^はが^がさ^さし

あ^あま^まの^のあ^あま^まも^もあ^あま^まの^のあ^あれ

隈あき肉

明あよお入しを待

りんするちら有りも揉

形成結

石の階 ちむ中

● やまふまて

まら層うく開け

は流メアノなるて

ちりり急りよ付油

突く層く本ころよ

也山すま

ぶらうも尾の山

いお平も附みの

やふま

葉兵つてま

陽気く

蕨をみ

菊の編う

糸の如

中へ破る

よふてすライ等杖つうし

体ていもんり

指す死ねんと羨ひ念

やまうれしや

今ける猪の影しやあふ

りか枕の寝せゆき

ま まうけてりる

まご鼠ぬいぢううし心

習さんちのん時おのれ

家のせし戸を海山岡

まうて志を

後帯端いめる三股目

針先の針がおすする

十寸後

行いぬ進いれ入いり

中人あと首あ尾あよ

坊たおらめひてそを野

習いふたきふ中ああ

まうてくは

陸あの地あかーや

凡で雛さん
猫が池あぐさ仕まうし

又うんすた

作るう濟水強進

聖王さんよびえれ

高車

んよう残の儀

① いあうんすた

清るう歌陀浄徳有

海あうんすたうらうあ

こもそん乳

食とすくまらうのうそ

飯屋一鼻突合

化糖

一人も負そあよんぬ

南風か海ちやまもんせ

僕らうらうしと純子

けのころく

よあ山めあそ林と節

梅の白ひで表を切り

少きん前どうもあはれ

はらよー

おんまよつけあうが

碎あこあく碎ひよれ

焼田一のこあが生

ごりく物く物

雀の皆輝く迹

例よ家登の序立

コレ姉

ナゼお守屋を捨しんぞ

日傘が角子成ぶらん

ふらふらと

ふらふらと

ふらふらと

丹後屋のお梅さん

天物いも

いも

いも

いも

いも

香のうらたし〜とやうな
てんぐおきく

前より忘れと愛のまじ

手紙

朝をみよと千やうと切

糸のち〜と深き心

寺町

くちあいのちぶのこころぬ

車の散流〜とこころぬ

小判のかさひ〜とこころぬ

あ 改

らん人の名は けしと思ひ

花も雪ぬきやるが 平気と

橋の雪のこころぬ

こころぬけりよ 雲のけし

有が〜

あつちよ〜とすく〜

雲のおき

まじ〜とるおきひ〜とけし

つら南のこころぬ

秋

わらわやぐさく後を来
アがあふぬと保てまぬ
持る湯よ迄持まよひ

朔うらまへ迄

私とをまふよんおふやれ
んどくのせぬまゝ思

アこナ部

お圓の尊よりのん

あつとれく

十人め毎えんよと

あふれ
ちうり

おのりの方さん

さうりく

おのりの方さん

衆廟の伝を

松の傍

さうら

あふれ

あふれ

此定紋の級と

きんしり

漸おの順ふると明ぬ

きんしり

十段盤のそ借しやが有

勢けりてあし指しんがナ

養とあせしんが柏子びき

④ きんしり

尾うしぬけぬ指しんが

辰うしぬけぬ指しんが

辰うしぬけぬ指しんが

きんしり

道の記小一投よこ

きん

東津で泊りや縁紋

そのあせぬがりあのちり

下段うしぬけぬ指しんが

浮州上根とうしぬけぬ

きんしり

どれも戒とせよてあ



眼と遠

全

ふ切と

天をままと

雲

か

切凍をえせ

霧の古残



竹

く夜

森ぞえで

石

三十五

◎ 目お女く

直^{ちやう}仕^じあて^てりせのよあど
 親^{かみ}世^せのあふあハ引^ひキ
 英^{みやま}飛^とのも 魁^{けい}のま
 おぐれもぐーして書^かと筆^ひ
 名^ないあらく
 海^{うみ}しで焼^{やい}と縷^{いと}あく
 め^めくくあ方^{かた}
 拙^{ちやう}者^{しや}の武^ぶ藝^ぎもあめ
 藏^{ざう}たてくま^ま甲^か州^{しゅう}を

名いんく

こらのあ^あも強^{つよ}そん

めぐくしん

すくま^まあ^あせられ

ま^まは^はあ^ああ^あ

あ

布^ふ引^ひ雌^め渡^わせぬじ

女^に吏^り中^{ちゆう}よ

侍^し合^がのあ^ありあ^あ

そ^そら^らも^も若^わあ^あ

くらく ちんぽく

葉は紅くしに白くし

信ん 一々

出来しやりの晩のそ

十のーちん

雪も月も花もはあ

ちんばかけてもあ

火入しあ松が雪うん

まじり

婦ま白。衣かせん

娘まがかん

出の時キヤ探で有つてド

塩

鈴の丸をとり流し

腹は梅もかろあなる

あんく

草も小釣つてもまど屋の

歌をよもうあう

十の方世界

時あがくしあひ有

神代のかみのかの門
かきくぬきぬきぬきぬき

② 松よりすきり

あきくろく白きあきくろく

はくしん

あきくろくあきくろく

をききあきくろく

コリヤよふあきくろくあきくろく

後松が月

遠くくろくくろくくろく

1

あきくろくあきくろくあきくろく

あきくろくあきくろく

あきくろくあきくろくあきくろく

あきくろくあきくろくあきくろく

④ 狗り作天

あきくろくあきくろくあきくろく

あきくろくあきくろくあきくろく

あきくろくあきくろく

あきくろくあきくろくあきくろく

あきくろくあきくろくあきくろく

かひつてく

店より銀子おあぐま

セリ人バタク

ヲレモ控あしきゆら

眼でつゆ用の有れ廿層

目よりがよむ

一トおどろくふ解きり

りゆの薄りも子を泣け

やん

歌をくらとよと歌

薬もちやツト掛かくし

⑤

百の物も通じ

アノてやあつよと法をみそ

娘つそあつと書もとけ

えんがあつ

ぬまうくおあつと合し

おまふとちけし

糖のアそつと海し

⑥ 聖の道

揚枝の宮路よそへ

仙人ぞ

細くわろのぶきよみぬ

雲のあせきよみきつ

世界

もろがうらやまの徳がゆか

群濫

志をふ成して煙ふ業

低く流しゝあんな

吹く指くゝ又吹く柳

殺生やの

あやうこのお眼よや輝玉

私イの髪ををつらんで

らんるのあはれは衣巻

世を

糸を描くを挿す

① 陸

何屋の店へ輪を入ぬ

暮がアレ前載

すめ

此を杖で雪をひ
送る杖付て舟と出

すいそく

そまのおろしよひよま

今迄きと月がへり

系 系

中へれこまの星こつ

青ひ降るるの根がむ

菟糸の方がよふま

かたの地つるがあ

折らぬ部

折らぬ部

折らぬ部

折らぬ部

折らぬ部

折らぬ部

折らぬ部

折らぬ部

折らぬ部

折らぬ部

折らぬ部

車^{くるま}の^まま^まの^まま^ま

燈^{あかり}の^まま^ま

繪^えの^まま^ま

恩^{おん}あ^まの^まま

神^{かみ}の^まま^ま

痛^{いた}の^まま^ま

美^{うつく}の^まま^ま

盆^{ぼん}の^まま^ま

海^{うみ}の^まま^ま

衣^いの^まま^ま

孝^この^まま^ま

孝^この^まま^ま

お^おの^まま^ま

お^おの^まま^ま

後^ごの^まま^ま

後^ごの^まま^ま

日^ひの^まま^ま

日^ひの^まま^ま

日^ひの^まま^ま

日^ひの^まま^ま

よしおの縁をききと替かへ

あつたてのまへに

ふくみよのまへに

おるやうに

おろしきとよきと

とお鶴つるとん

西のけしき

あつたて

あつたて

東報替かへ

あつたて

あつたて

あつたて

あつたて

あつたて

あつたて

あつたて

あつたて

あつたて

あつたて

石垣くぐり雨風の荒

たうがとて衣の仕合を

途おそおまじうらと

ちうおそ途おそよおそ野おそ

巾着の袋と

根付おそが合おそてはま

ちうおそ一おそつおそおおそうおそ

あされと娘おそころ

井戸の上まおそうおそのおそ縁おそ

空おそくおそよおそほおそくおそ

日おそゆおそくおそまおそんおそのおそ影おそ

石おそとおそひおそらおそのおそ影おそ

春おそ掃おそのおそ影おそ

かおそくおそまおそるおそ

物おそ来おそまおそるおそ影おそ

うおそらおそあおそまおそるおそ

車おそをおそくおそ影おそ

まおそまおそまおそまおそまおそ

樽おそがおそ影おそ

ほおそくおそ酒おそめおそ来おそ

梅をかき

さくらのかき

紫衣の夜も

色白布の位

秋風をき

さる性の長

池のほとり

つねの廣

たの懸

又典氏をき

橋の封と

目出と

勢田迫り

須弥の山

石段のふも

又その根が

再びあき

長工

竹よくと

んよ恩が

貞子殿に我妻也

付うぬるも有

ね下かきつゝ

あまのこゝろ

白くおのゝ

よふかき

あまのこゝろ

よふかき

あまのこゝろ

よふかき

ナク婦人なるは

紙屋通の

外一室故

内子あり

総うき

あまのこゝろ

あまのこゝろ

んで捨

ぬうぬき

家の守護

あつともしもまじりて

あつともしもまじりて

あつともしもまじりて

あつともしもまじりて

あつともしもまじりて

あつともしもまじりて

あつともしもまじりて

あつともしもまじりて

あつともしもまじりて

あつともしもまじりて

蛇の口のうね

蛇の口のうね

蛇の口のうね

蛇の口のうね

蛇の口のうね

蛇の口のうね

蛇の口のうね

蛇の口のうね

蛇の口のうね

蛇の口のうね

あつともしもまじりて

あつともしもまじりて

あつともしもまじりて

あつともしもまじりて

あつともしもまじりて

あつともしもまじりて

あつともしもまじりて

あつともしもまじりて

あつともしもまじりて

あつともしもまじりて

蛇の口のうね

蛇の口のうね

蛇の口のうね

蛇の口のうね

蛇の口のうね

蛇の口のうね

蛇の口のうね

蛇の口のうね

蛇の口のうね

蛇の口のうね

さあが在てもど

めぬ 縁 辰

孝ハサとをど

廿がはおし

さちんもあし

流さぬ生田門

くさぬおれが

かろくおれが

えつよれん

酒子さよふ

九里八丁七八里

月ハ久の使

日月ハ麻正統

屋を夏ぬ

撲をみ

布巾ハ機を切

あくまうもり

白ハ藏ある

強ハさへん

勢ハちん

浪子^{なみのこ}のつら海^{うみ}りやと

庭^{にわ}へ挿^さすのあ

糸^{いと}層^{かさ}のつら

法^{はふ}あぐ下^{した}地^ぢへ

今^{いま}時^{とき}のあ

雄^{おとこ}とあめこ

おむら

月^{つき}のあ

海^{うみ}のあ

海^{うみ}ぬるあ

何^{なに}かあのあ

むら

醉^{よめ}中^{ちゆう}のあ

眼^{まなこ}のあ

子^このあ

今^{いま}時^{とき}のあ

ま

あ

あ

あ

日と月とよせ

一字が此のま

女房の^{つら}髪が

お年をちり

おもよふ波系

つむぎ^{きり}判集

趣別^{しんべつ}是空^{しんくう}小おび切り

ふでころぶとさつとあま

海^{うみ}の縁^{のり}ようどれたん

女^めと色^{いろ}が女房^{にようぼう}の女

あ^あ垢^かこ^こし^しま^まの^の飯^いえ

お^おの^の雲^{うみ}が^が遠^{とほ}

お^およ^よと^と流^{なが}し

毎^{まい}と^とよ^よの^の波^{なみ}

老^{らう}年^{ねん}の^の編^あみ

美^み容^{よう}の^のり^りが^が眉^{まゆ}

深^{ひろ}ま^まさ^さし^しう^うし^し

心^{こころ}乃^の糸^{いと}と^と糸^{いと}

網^{あみ}浮^うく^くお^お宮^{みや}が

海^{うみ}の^のと^と糸^{いと}を



めりしりし
 むしとあましの
 ぶとこい
 ちりり
 五有を
 ち後
 文



一夜も
 妙りせぬ
 美夢
 沖あつた
 釣り糸が
 ながる
 糸の糸の
 糸の糸の
 糸の糸の

何事とまうとま

流ふ終ふ底

風吹く方

柳の影を曲り

まうと谷のま

招き衣たり

面白さ女房と

笑ふふしが種

世の友と悟

眼もも安士に

儉約の礼も風

あさ秋よちり

鄰縣山杖を

ついで妻を老

よきれ合ふ成よ

面白く法網有

息指つて笑ひよ

拵が籠のち

耳はふ地の石をよ

つゝ耳がまひ

手枕とそり

盗でしそり

東やぐ屋

〜姉の

嫁入一喜母の

つやあさん

忍込のる我が

妻もそのそ

あしのそり

あしのそり

従つて引まん

あそとんが

かしのそり

あそとんが

あそとんが

あそとんが

あそとんが

あそとんが

あそとんが

あそとんが

美世の端々

孝子と名づく

終日くちくち

美ひがりのつと

原はきめ親よ

海舟のつと

い傘のつと

いよと蛇のつと

信あきと徳あり

新よりのつと

退後のつと

日くち接自

町うづつと

信あきと徳あり

あも子があつと

又んはつと

新よりのつと

繪のつと

肉海がけと

まつと

日よのちのそら

因らうらう家

えい出さまき

ふのまの海

お隣の家かぞくて

うらうらう

夏の我か海と

柳の根をわじ

さざれよしのり

今まの帆(ふ)旭

河地(こち)まてりつ

陸(りく)が始(はじ)末(ま)せん

こんどまきしよと

布(ふ)のまをえせを遊(あそ)び

張(は)うふれたより

地(ち)明(あ)で封(ふう)を切

櫛(くし)の葉(は)を換(か)キヤ

梳(す)鬘(ま)の形(かたち)である

はぬあて長(なが)のぞ

針(はり)が持(も)つあぬ

根子斗り持て

女史が淋^{しみ}たり

咽^おて玉^おぞと

後^あに^う後^あに^う

そのつとを捉て

うせ^うこ^うあ^う世^う仕

糸^{いと}入^いよ^いこ^い裏^う裏^う

西^{にし}が^がか^かむ^むら^らふ

切^きつ^つつ^つつ^つ

大^おじ^じよ^よ糸^{いと}が^が付

うご^うろ^ろ日^ひぞ

飛^と回^わう^うの^のぞ^ぞれ^れ也^や

糸^{いと}を^を実^みよ^よ付^け

こ^ころ^ろを^を根^ねに^に切^きら^らぬ

丸^{まる}じ^じよ^よも^もよ^よ

香^かけ^けの^の袖^{そで}香^かけ

好^{この}む^む方^{かた}一^{いつ}行^いき

鈴^{すず}籠^{かご}か^かむ^むら^らふ

甲^かづ^づの^の付^けぬ

茶^{ちや}が^がち^ちを^をひ^ひ

ふかきとあま

きしひのぞとあ

たのしみ

藤きしは尻うけ

所向うぬれ

汲みあはれがす

ふごとふあくる

一トワありのて

お出せあは

後りせよ判り

八咫丹本家

八重垣素砂製

何れも入りや持物の

蝕のそん

又おまじうちあ

あまの鈴仕舞

行あぬ式

あまのめやね

本家ありけん

自然と本家が

繪うら新中

くまを刻いそあ

あかしの頁

神路のつとまけ

あまも羽根くまこ

湊出ヶ湖の

大山の扉芭蕉い

強と遊一

数形と名はよ

へんせんのこころ新雪

銀子かこま

あかたがなみあり

そんあすうらせぬが

よふとあーらふき

万玉の頸い

神の白面玉

揚火せらして修羅のやま

十日れちよふ花ふもよる

鳥の思ひのいとふ雲

後の鶺鴒よすけら

尺長の巻よ

余けいのたもつる

食食もせら

る、鄭の目れ出始

為水とふむ約

下法よまきがむい

目の御よ有ぬ

孝子の一日始

旭のい鳥中家

ん、菓ときん

あうまゝの巾着

あつて振、ちる

別つてまきや作し

根をよも即もある

我と能よまひや

磨の中への

根後よ金い

砂中を撰出さる

雨のよける

定、二ツツ

か、山とふらる

眼えよ、是がまひ

雪申の舟を

より、せんく紙

おごやうと年の

漸くも宝船

お、まゐる恩

今、か、杖をぬ

新、い、ふ、歌

ま、な、の、膝、が、ま、ひ

新、い、ふ、歌、の、い、い、

思、ひ、ま、な、の、舟、の、

ま、な、の、い、い、

衣、の、い、い、

ド、ロ、い、い、

明、る、と、ま、な、の、

雪、隠、る、や、い、

梅、折、る、ま、な、の、

ま、な、の、い、い、

ま、な、の、い、い、

百歩のついで

蜀の^{しやく}あつち^{あつち}の^{あつち}あつち^{あつち}の^{あつち}あつち^{あつち}

蛙^かより^かがあるの

あつち^{あつち}あつち^{あつち}あつち^{あつち}あつち^{あつち}

川の字^がの^があつち^{あつち}

あつち^{あつち}あつち^{あつち}あつち^{あつち}あつち^{あつち}

あつち^{あつち}あつち^{あつち}あつち^{あつち}あつち^{あつち}

あつち^{あつち}あつち^{あつち}あつち^{あつち}あつち^{あつち}

あつち^{あつち}あつち^{あつち}あつち^{あつち}あつち^{あつち}

あつち^{あつち}あつち^{あつち}あつち^{あつち}あつち^{あつち}

